

成功や失敗には、必ず理由がある。

有限会社アクセル エルヴェ代表取締役：岡本 功一

栃木県No.1を目指す

岡本功一氏の語る夢は「栃木県と言えは、おしゃれな美容のまち」と言われること。そして、県内約4000件ある美容室の中で「栃木一の店。店舗数やスタッフ数ではなく、クオリティでNo.1になりたい」という崇高なもの。昨年6月にオープンした鹿沼店は、そんな彼の意気込みが凝縮したようなサロンだ。

高級リゾートホテルのような佇まい。これが美容室かと思うほど、贅沢な空間レイアウト。そして、何よりも心地良いのは、スタッフ達からのおもてなし。もちろん、自分らしさを引き出してくれる、スタイリストの技術力も高



Profile

岡本 功一 (おかもと こういち)

昭和45年9月18日生まれ。41歳。矢板市出身。16歳で美容の世界に入り、21歳で店長、25歳で独立。その後、ファッションの発信地ロンドンやニューヨークを訪れ腕と感性を磨く。昨年6月8日に、3店舗目になる敷地面積500坪の鹿沼店をオープン。栃木県一の超大型サロンで、高い技術とネイルやエステなど先駆的メニューで業界から注目を集め、良質な接客は他業種にも定評がある。



い。このヨーロッパ王室のようなリゾートサロンは、中卒で美容業界に入り、25歳で独立し、バリ島リゾート風の城東店、アジアリゾート風の砂田店を経て、40歳でようやく手にした念願の店なのだ。かつて、お金がなくて建材も取りも妥協してくやしさをしたからこそ、妥協しない店にこだわった。

一人では生きていけない

「ずっと、先輩達に追いつけ、追い越せでやってきた。その為には、まずはうわものからつくろ」と考えた。夢のひとつが叶ったと。意外なのは、出店のタイミングや建てる場所、入口やシャンプー台など美容室として大切な場所は、

風水を取り入れて優先的に決めたと。「若いうちにそういうことを知ったのも一つの宝」と事務所には立派な神棚が祀ってあった。「4、5年前から月1回は寺に参り、境内の掃除をずっと続けている」そうだ。鹿沼店を出す目標を抱き、出させていたできた」と願ひ、夢が叶っても続けている。きつと、手を合わせることで自分自身と向き合い、見つめなおし、決意を新たにしてきたのだろう。

「子どもものがきつかけで出会った占い師の方に、店の場所が悪いと言われた。経営面で一番悩んでいた時で、人は入れればやめるの繰り返し。それで、自分だけじゃなく、場所も悪かったんだと知った」ことが移転するきっかけに。ま

るまる信じるのではなく、やって損はないという選択が、大きな転機になる。

独立して最初の店は、パンクなイメージの自分の感性をあますところなく表現した男っぽいの店。これこそがカッコいいと思っていた。ところが、なかなか自分の右腕が育たず、失敗と苦悩の中で、自己満足の店ではかないと気づく。そこで、移転した砂田店は、自分を押しえ女性目線、周りとのバランスがとれた、お客様を第1に考えた店。180度の転換である。

成功あり、失敗ありの長いキャリアの中で、美容界を知りつくした彼は、人を育てられない店が転落しているのを見て、「俺は俺はじゃ、会社を大きくすることができない。人は一人では

生きていけない。周りのスタッフや人の応援サポートがないと大きくなれない」と悟る。今では会社の理念にも掲げ、人を育てることに情熱を注ぐようになった。

当たり前前のことを地道に積み重ねる

ごく普通のサラリーマン家庭に生まれ、姉と二人で中学まで矢板市で育つ。勉強は嫌いだ。スポーツにはたけ、「負けん気もあってこれと決めたらやっちゃう」と、野球部で活躍。当時、中学生男子は全員坊主頭。頭髪や服装などしぼられることがいやで、いくつになっても自分の好きな髪形、ファッションでいられる仕事は美容師しかないと想着、16歳で飛び込んだ世界。自分を鼓舞するためにあえて環境を変えようと、誰も知っている人がいない町。そして都会への憧れもあって、宇都宮を選ぶ。何のつても応援もなく、104の電話番号内でもよくや見つけたお店に就職。周りは皆年上ばかりで、下積みと通信教育でコツコツとキャリアを積み、21歳の若さで25人の中で店長に抜擢される。

「店長に選んでくれたことに感謝。任せられて責任を負って変わって」と。あきつぽい性格だけど、この仕事だけはしんどいとも、やめたいとも思わない」と。今では天職といつても過言ではない。「一見華やかに見える世界で、憧れだけでは続かない、ややもすると楽に流れがちな中、当たり前前のご地道に積み重ねることが大切さを、経験の中から知った彼は、スタッフ達にもその思いを伝え続ける。「失敗や成功には、必ず理由がある」と。

ただ時として、経営者なら誰しも感じる孤独感から「自分は美容師という職人が合っている、経営者にならなければよかった」と思うこともある。そのためか、1年に1回は必ず「ニューヨークの雑踏の中に身を置きに行く。5年前、日本でどんなにキャリアや実力があっても、下積みから始めてようやくハサミを握れるというシビリアン世界にチャレンジした地でもある。」「様々な人種がエネルギーに行き交い、さすがしい躍動感に触れると、夢が大きく膨らみパワーをもらえる。それを地元で落としこむ」と。そこには、「栃木を変えたい」という熱い地元愛が感じられた。これと決めたら二途に進進する。アクセルは前進。エルヴェは上昇。ただ前進あるのみ。まだまだ夢の途中なのだ。

取材日：平成24年2月9日